pp. 33–54

在日ムスリム留学生の
ヒジャーブ着脱行為をめぐる価値の変容過程
TEA による 3 名の事例分析

発行：2023 年 9 月 9 日
［掲載決定: 2023 年 8 月 2 日］

中野 祥子（山口大学 教育・学生支援機構）

概　要

本研究の目的は在日ムスリム留学生のヒジャーブ着脱をめぐる行為と価値の変容過程について TEA を用いて検討することである。留学前後でヒジャーブ着脱行為が変容した経験をもつ 3 名のムスリム留学生を対象に，3 度に渡り半構造化面接を行い，日本留学から帰国後現在に至るまでのヒジャーブ着脱行為についての認知・感情・行動を尋ねた。TEM 図により行動と出来事の変遷を，TLMG を用いて価値の変容を個別に捉えていった。その結果，彼女たちが「日本への留学」，「日本人によるヒジャーブ着用に対する質問」，「帰国」を通じて，ヒジャーブ着用の価値を問い直し，着脱行為を変容させていく多様な過程が明らかになった。ヒジャーブ着脱は必ずしもイスラームの教義解釈や信仰心を表すものではなく，彼女たちにとっての固有の意味をもっていた。さらに，ヒジャーブ着用に対する価値・信念は行為に即時的に反映されるとは限らず，乖離している場合や時を経て反映されていく場合があることがわかった。在日ムスリム女性が，状況や周囲，神との関係に影響されながら振る舞いや行為の意味づけを変容していることが示唆された。

キーワード：在日ムスリム，留学生，ヒジャーブ，複線径路等至性アプローチ，
発生の三層モデル

連絡先：中野 祥子（E-mail: s-nakano@yamaguchi-u.ac.jp）

Japanese Journal of TEA for Qualitative Inquiry, 2023, Vol. 1, No. 1

pp. 33–54

The Change in Values Surrounding Wearing the Hijab:

A Case Study of Three Muslim Students in Japan Using the Trajectory Equifinality Approach

Published: September 9, 2023
[Accepted: August 2, 2023]

NAKANO Sachiko (*Organization of Education and Student Affairs, Yamaguchi University*)

Abstract

In this study, we examined changes in the behavior and values of Muslim students in Japan toward wearing the hijab. The Trajectory Equifinality Approach was used, and semi-structured interviews were conducted with three Muslim international students whose hijab-wearing behavior changed after studying in Japan. We asked about their perceptions regarding such behavior prior to studying in Japan and after returning to their home country. A figure of Trajectory Equifinality Modeling shows the transition in behavior, and the Three-Layers Model of Genesis shows a separate change in values. The students interviewed said that studying in Japan, questions by the Japanese about the hijab, and returning to their home country made them question wearing it. Their behavior changed in terms of putting the hijab on and taking it off. Wearing the hijab did not reflect their interpretation of Islamic doctrine, religious beliefs, or values. Study findings suggest that changes in the behavior and actions of Muslim women in Japan are influenced by their surroundings, circumstances, and relationship with God.

Keywords: Muslims in Japan, International Student, Hijab, Trajectory Equifinality Approach, Three Layers Model of Genesis

Correspondence concerning this article should be sent to:
NAKANO Sachiko (E-mail: s-nakano@yamaguchi-u.ac.jp).

問題と目的

本稿では，在日ムスリム留学生のヒジャーブ（頭に被っているスカーフ）着脱をめぐる行為と価値の変容過程について検討する。具体的には，3 名のムスリム留学生が日本への留学を機にヒジャーブの着脱について葛藤し，着用の意味や価値を問い直しながら，行為変容していく過程を時間経過に沿って読み解いていく。本研究の結果を解釈するにあたり必要となるムスリムの信条や特性と本研究の問題背景を以下に述べる。

1. イスラームの教えに基づいた価値観および行動様式

「ムスリム」とは，イスラーム教信者のことを指す。また，アラビア語ではムスリムの女性を「ムスリマ」と呼ぶ。イスラーム教は，キリスト教，仏教とともに世界三大宗教の一つに数えられる。ムスリムは 2020 年には 19 億人に達し，今や世界人口の約 4 分の 1 を占める（Pew Research Center, 2020）。近年は，中東をしのぎ東南アジアがムスリム人口の最大を誇っている。それゆえ日本の大学でも留学生として多数のムスリム学生が見られるようになった。

イスラーム教とは，唯一の神「アッラー」を信じる一神教である。イスラーム教の経典であるコーランには守るべき信条と取るべき行為が定められている。守るべき信条には 5 つの柱；1）アッラーを唯一神と信じること，2）その預言者ムハンマドを信じること，3）聖典（クルアーン）にある啓示を信じること，4）現世には終りがあり，来世（死後）の存在を信じること，5）全ての人間の運命が神によって定められていると信じること，がある（イスラーム文化センター，2005）。取るべき行動の一つにヒジャーブの着用がある。ムスリムの女性は顔，手首，足首から先以外の全身を家族以外の異性の前で隠すことが望ましいとされている。そのため女性は，家の外ではヒジャーブを着用し，頭髪を隠している。ヒジャーブは清潔さと慎み深さを象徴するものとされている（桜井，2003）。どこまで覆い隠すかは，国によってまた個人によって異なる[*1]。また，イスラーム教を信仰していてもヒジャーブを着用していない場合もある。その他には，1 日 5 回の礼拝習慣や飲食の制限がある。ムスリムはアルコールと豚肉およびイスラーム法に則った方法で処理されていない肉の飲食が禁じられている（赤堀，2003）。また，製造過程においても禁じられた食材との隔離を徹底されなければならない。これらの決まりに従った食品を「ハラールフード」という。日本にいるムスリムはハラールフードの少なさゆえに食事確保や日本人との食を介した対人交流にしばしば苦労を伴う（Nakano et al., 2015）。このようにムスリムには日常生活に密着した様々な戒律があり，それを忠実に守った者は死後におとずれる来世で天国に導かれ，背いた者は地獄で永遠の責め苦を味わうとされる（吉田，2003）。死後の行先を決める最後の審判で現世の行動について裁かれるといい，それゆえ留学中であってもイスラームの教えに従い，神との関係を良好に築こうと努力するムスリムは少なくない。

筆者はこれまでに在日ムスリム留学生の異文化適応像の解明を主題に，ムスリムと日本文化との異文化接触時の認知・感情・行動について検討してきた。その中で，ムスリマ留学生がヒジャーブ姿に対して周囲がどう思うかを心配したり（Nakano et al., 2017），着用の意味を見失って葛藤したりする事例をみた。留学中にヒジャーブをはずし始める者や，反対に，つけ始める者もいた。彼女らのヒジャーブ着脱行為は何を契機に，どのように行われるのか，それにはいかなる価値の変容を伴うのかは未詳であり，これらを検討することは，異文化下における，認知，感情，行動の変遷を追うという点で，在日ムスリムの異文化適応像を読み解く一助となるであろう。

2. TEA を用いて何を明らかにしたいか

分析には TEA（複線径路等至性アプローチ，Trajectory Equifinality Approach）を用いる。その理由は，第一に，留学から帰国後の一連の経験をみるには時間軸は無視できないからである。行為と価値の変容点を出来事の流れの中でおさえていきたい。特に来日や帰国といった環境の変化が与える影響は興味深い。TEM（複線径路等至性モデリング，Trajectory Equifinality Modeling）において，着脱行為の変容に影響を与えるものを SG（社会的助勢，Social Guidance）および SD（社会的方向づけ，Social Direction）として示すことで，着脱をめぐる葛藤の様相を捉えられる。

第二に，着脱行為の変容と併せてヒジャーブ着用に対する価値変容を明らかにしたいからである。ムスリムに

[*1] ムスリマが被っているスカーフには様々な種類があり，形によって名前が異なる。本稿では，日本にいるムスリムに最もよく見られる「ヒジャーブ」の着用者を研究対象とした。

は遵守すべき行動様式や価値観があるため，文化受容に伴う行為変容は容易ではない。在日ムスリムの異文化葛藤への対処方略について調べた Nakano et al.（2017）では，彼らが問題解決に向けて行動を変える代わりに，問題に対する解釈を変えたり，祈ることでストレスを発散させたりして困難感の軽減を試みる認知的対処が多用されていた。宗教的禁忌に触れる行動を伴う変容よりも，解釈や意味づけを変える認知的な対応のほうがムスリムには取りやすい傾向がある。行動面において一見何も変わっていないように見えても，認知的側面では日本の文化習慣への理解が進んでいたりする場合もある。例えば，飲み会には参加しないものの，飲み会は日本人にとって重要な親睦の場であると解釈することで，飲み会に参加する日本人への不信感を払拭できた事例がある（中野ら，2017）。行動的側面と認知的側面の両面からの解釈が求められる。

また，行為そのものと，行為への解釈や意味づけが必ずしも一致しない可能性もある。片倉（1990）では，カナダに住むムスリムがクリスマスパーティーを，キリストではなく 1 年の終わりを祝う会だと捉え直すことで，自らもパーティーに参加し，周囲のお祭り気分に馴染もうとする事例が報告されている。Nakano & Tanaka（2017）では，在日ムスリムが肉の購入時に，日本国産を避け，アメリカ産のノンハラール肉を食べるようになった事例がある。この行為は，一見，異文化環境で信仰心が薄れて食の制限を遵守する基準が緩和されたように見えるかもしれない。しかし実際は，「ユダヤ教徒もキリスト教徒も同じ啓典の民で一神教徒であるため，ユダヤ教徒とキリスト教徒が処理した肉ならば，間違った神に捧げられているのではないと解釈し，その肉はハラールとみなす」，という彼らなりの新しい意味づけによる行動変容であった。つまり，その行為に期待される一般的な意味と本人たちなりの意味づけは異なっている。ムスリマのヒジャーブの着用は戒律の一つであり，脱衣への行為変容は容易ではない。彼女たちの行動が変容したとき，それは単なる信仰心の変化を表すとは限らないため，その奥に潜む意味づけにも目を向ける必要がある。異文化接触時の困難解決において認知的なアプローチを取りやすいムスリムの場合，行為として表面化していなくとも，認知的側面ではヒジャーブに対する意味づけが変容しているかもしれない。以上のことから，彼女たちの着脱行為の変容とともに，その奥に潜む価値の変容にも注目したい。TEM で行為変容過程を，TLMG（発生の三層モデル，Three Layers Model of Genesis）を用いて価値の変容過程をとらえていく。

在日ムスリムの異文化適応においては日本人側の理解の乏しさが指摘されている（Nakano et al., 2015）。日本人は戒律から連想されるムスリム像に固執し，ムスリムを一様に捉えやすい傾向があるという（中野・田中，2019）。本研究では，3 名の個々の経験を行動と価値の両面から丁寧にみていくことで，多様なムスリム像の提示と理解を促したい。それは，多様な適応の様相を読み解く手がかりにもなり得る。

方 法

1. 調査協力者

HSI（歴史的構造化ご招待，Historically Structured Inviting）の観点から，日本への留学前後でヒジャーブ着用行為が変容した，つまりヒジャーブをつけ始めた，あるいは，はずし始めた経験を持つムスリマを対象とした（表 1）。具体的には，日本の地方国立大学 X，Y，Z に留学していたムスリマ学生 3 名で，3 名とも帰国してから調査時点で 2 年が経過していた。対象者の人数は TEM の「1・4・9 の法則」に準拠した。これは 1 名を対象にすれば個人の径路の深みを，4 ± 1 名では経験の多様性

表 1　調査協力者の概要

調査協力者	年齢	学籍（留学中）	専攻	滞日年数	出身地域	配偶者（留学中）	ヒジャーブの着用/非着用				
							留学前		留学中		帰国後
Aさん	20代	大学院生	理科系	3年間	東南アジア	なし	着用	→	着用	→	非着用
Bさん	20代	大学院生	理科系	3年間	中東	なし	着用	→	非着用	→	着用
Cさん	20代	大学院生	理科系	3年間	東南アジア	なし	非着用	→	着用	→	着用

を，9 ± 2 名では径路の類型を把握することができるというものである（安田・サトウ，2012）。本研究では，ヒジャーブ着脱行為に至るまでの過程とそれにまつわる価値の変容の多様性をみたいことから，対象者数を 3 名とした。

2. データの収集

まず，研究趣旨を説明し，プライバシー保護と匿名性の担保を確約した。倫理的配慮として，途中でいつでも調査協力を辞退してもいいこと，答えたくないことは答えなくてもいいこと，提示してほしくない内容は公表を控えることを伝え，承諾を得た。特にヒジャーブの脱衣行為は個人の取り巻く環境によっては非常にセンシティブな問題であるため，結果の提示では本人が特定されないよう十分に配慮した。なお，調査協力者の意向により，個人の特定を避けるため調査時期の公表を控える。

半構造化面接を行い，留学中を中心に留学前，帰国後も含めて，ヒジャーブ着脱の選択に至るまでの認知・感情・行動を時間軸に沿いながら振り返り語ってもらった。具体的には次の 5 点を中心に尋ね，その都度気になったポイントを詳細に時間軸に照らしながら確認していった。1）ヒジャーブの着脱行為について；来日前ヒジャーブを着用していたか，それが留学中そして帰国後にどう変化したか，あるいはしなかったか，2）ヒジャーブ着用に対する価値（意味づけ）について；ヒジャーブ着用は，そのときのあなたにとってどのような意味を持っていたか，どのような価値を持っていると感じていたか，ヒジャーブの着用についてどう思っていたか，ヒジャーブに対する考え方は変わったか，あるいは変わらなかったか，3）ヒジャーブ着脱行為および価値の変容の理由について；なぜヒジャーブを着（脱）衣することにしたのか，何をきっかけにヒジャーブに対する考え方が変わったか，そのときの気持ちはどうか，4）分岐点および促進記号について；ヒジャーブに対する考え方が変わるに至った／ヒジャーブを着（脱）衣するに至ったターニングポイントはあったか，あると感じている場合，何であったと思うか，5）未来展望について；これからどのように生きていきたいか，これからヒジャーブとどのように付き合って（向き合って）いきたいかという理想や特別な想いや考えがあるか，あるいはないか。

語りは許可をとり録音した。音声を書き起こし，逐語録を作成して分析に用いた。インタビューは 1 人につき 3 度，ビデオ通話で行った。1 度目は 1 時間半から 2 時間，2 度目は 1 時間半，3 度目は 30 分程度行った。主に日本語で行われたが，ところどころ英語も交えながら進めていった。英語の部分は音声を英語で書き起こした後，日本語に翻訳してから分析に用いた。

3. データの分析方法

（1）TEM 図の作成

ヒジャーブ着脱行為の変容の経験に関する語りを，カード化したうえで KJ 法（川喜田，1967）を援用してデータをまとめた。具体的には，状況や行動，認知や感情に注目して意味のまとまりごとに切片化し，個々に見出しをつけていった。ヒジャーブ着脱に関して，《EFP 行為[*2]変容する》を EFP（等至点，Equifinality Point），《P-EFP 行為変容しない》を P-EFP（両極化した等至点，Polarized Equifinality Point）として，その径路を TEM 図にまとめた（図 1，3，5）。TEM 図では，非可逆的時間を表す時間軸を上から下に流れる矢印で表し，個別の出来事，認知，行動を時系列に並べていった。ヒジャーブ着脱行為が《EFP 行為変容する》へ促進するように働く力を SG として左側に，反対に EFP から遠ざけるように働く力を SD として右側に配置した。なお，調査協力者によって来日時のスカーフ着用状況が異なるため，《EFP 行為変容する》の内容が「ヒジャーブをはずす」ことを意味する場合と，反対に「ヒジャーブをつける」ことを意味する場合がある。その点を個々の TEM 図で確認されたい。加えて，径路の中で全員が通った経験 3 つ《OPP ① 日本に留学する》，《OPP ② 日本人からヒジャーブの（非）着用について質問される》，《OPP ③ 母国に帰る》を OPP（必須通過点，Obligatory Passage Point）とした。また，径路が発生・分岐するポイントを BFP（分岐点，Bifurcation Point）とした。個々に作成した TEM 図を 2 度目のインタビュー時に調査協力者に見せ，誤認や抜けがないかを確認し，修正したものを 3 度目のインタビューで見せた。TEM 図は日本語で作成したが，説明の際には必要に応じて英語で補足した。

[*2] 本稿において「行為」と「行動」という言葉が混在しているが，EFP における着脱行為の変容は「意思を持ってする行い」であると仮定して「行為」変容とした。

（2）TLMG による分析

それぞれの BFP におけるヒジャーブ着用に対する意味づけ・価値の変容を読み解くため，TLMG を用いて分析し，図示した。具体的には，BFP において何が契機となり，価値・意味づけにどのような変化が起こったのかに着目し，価値変容の契機となった心もちを PS（促進的記号，Promotor Sign）と捉え，図に可視化した。また，TLMG の第三層におけるヒジャーブ着用に対する価値・意味づけを VTM（価値変容点，Value Transformation Moment）として示した[*3]。さらに，行動変容と照合して見やすいよう，TEM 図の右側にも記した。TLMG の図では，可能な限り本人の語りをそのまま用いた。3 度目のインタビュー時に図を見せ，表現や解釈に齟齬がないかを確認した。

結果および考察

3 名のヒジャーブ着脱行為の変容に至るまでの径路とその価値の変容について個別に見ていく。一人一人の径路を詳しくみれば異文化接触における多様な認知・感情・行動のあり方がわかる。TEM の枠組みに従ってコード化した見出しおよび概念を二重山括弧《　》で括り，協力者の語りを引用する際は，短いものは鍵括弧「　」内にサンセリフ体で，長いものは四角枠［　］内にサンセリフ体で引用する。さらに，意味が分かりにくいところは必要に応じて丸括弧（　）内に意味を補う。TLMG の第二層における PS と第三層における VTM を隅付き括弧【　】内に示す。必要に応じて重要なところに下線 ̲ を引く。

1．A の場合

（1）来日から帰国まで

留学生 A の《EFP 行為変容（ヒジャーブをはずす）》に至るまでの径路を TEM 図（図 1）に，価値変容過程を TLMG 図（図 2）に示す。また，TLMG の第三層における価値・信念とそれに関する語りの詳細を表 2 に記す。

A は幼少期から日常的に《ヒジャーブを着用》していた。来日時に抱いていたヒジャーブの価値を【VTM ① 良いムスリムを象徴するもの】と振り返る（表 2-①）。来日前，ヒジャーブ姿が日本人の目にどう映るのかを不安に思っていた。ヒジャーブについて尋ねられるだろうと予想し，回答を事前に考えておいた。一方で，《SD 良いムスリムの見本を日本人に示したいという使命感》を強く抱き，高揚感もあった。「スカーフをつけているから（私が）ムスリムだとみんなわかる。ムスリムの代表として皆さんに良い印象を示そうと思って楽しみにしていました」と語る。《OPP ① 日本に留学する》と，予想通り《OPP ② 日本人からヒジャーブの着用について質問され》た。以下の語りにあるように《宗教の説明は難しいので my choice だと答え》た。

> 絶対にヒジャーブについて質問されると思っていたんですよ。だから準備していて。おばあちゃんと一緒に理由を考えたんですけど，結局，宗教について日本語で説明するのは難しいでしょう。だから「これは my choice だよ」って言うことにしました。「自分で決めたことだ」って，「自由に決めていいんだよ。選択は free なんです。だからこれは my choice」って。つけたいからつけているんだよって。

ところが，A は自分の選択だと繰り返し答えていくうちに「本当に my choice だったのだろうか」と《BFP ① ヒジャーブの着用に疑問を感じる》ようになった。これが TLMG の第二層で促進的記号を発生させ，価値変容を促す契機となる。A は自らの回答と真意に矛盾を感じ，ヒジャーブ着用の理由を振り返ったすえ，不本意な着用であったと認知した。

[*3] 本稿を脱稿した後、2023 年 8 月 19 日の「TLMG の先人によるワークショップ！ ～あなたは TLMG で何を描きますか？～」に参加したところ、VTM について理解を深めることができた。したがって、この文章のあとに以下の文章を注記し引用文献を加えることにする。

VTM とは TLMG の第三層で、個人における価値が変容するような経験、あるいは何か得心がいった状態を表す概念である（廣瀬，2012）。本研究では、ヒジャーブに対する価値・意味づけについて自問自答したすえに本人が得心した状態を VTM として示す。なお、本研究の VTM ①については、変容前の価値・意味づけであるが、本人がその価値・意味づけに得心していた状態のものとして示している。

最初は「my choice だから」って答えてたんですけど，気持ちはちょっと苦しくなってきて。嘘ついてるみたい（な感じが）して。本当に my choice かな。そもそも何でつけてたんだっけ，つけたいと思ったことはなかったんですよ。

ヒジャーブ脱衣の選択を助勢したのは《SG 宗教に無関心な日本人の存在》と《SG ヘアスタイルを自由に楽しむ日本人の存在》であった。

日本人のためにちゃんと（ヒジャーブを）しなきゃと思ってたんですけど，本当に意味があるのかなって，だんだん（思ってきた）。日本人（は），私のアピールに気がついてない。「日本人って興味ないね～宗教に。」って。「意味あるのかな～」って。じゃあ私も自分を見せたいなって。周りの（日本人の）皆は，休みが終わったときや，就活の前とか，ヘアスタイルが変わるんですよ，カラフルに。「いいな～」って。私も本当の自分をみせれば，友達になれるかもしれないなって。

自問自答を重ね，ヒジャーブ着用は【PS my choice だと思い込んでいたがそうではなかった】と気がついた。これが促進的記号であり，第三層のヒジャーブ着用の価値を【VTM ① 良いムスリムを象徴するもの】から【VTM ② 本当の自分を隠すもの】に変えた（表 2-②）。「本当はヒジャーブは必要ない」，「心から着用を望まないなら，それは my style を隠すもの」だと認知し，《ヒジャーブをはずしたいと思う》ようになった。ただし，ヒジャーブに対する価値観が変わっても，すぐに行動には移さなかった。ヒジャーブを不要だと感じて以降 2 年間，日本にいる間はヒジャーブをつけ続けた。

行為変容（ヒジャーブ脱衣）を抑制した要因は 5 つある。1 つ目は，《SD 親からの電話確認》である。親からのビデオ通話で，毎回のように戒律の遵守を心配されていた。「ビデオで姿が見えるから。ときどき外にいるときにも電話があるので（ヒジャーブをかぶって）なかったらわかってしまう」ことが抑制につながった。2 つ目は《SD 他のムスリムからの視線》である。A は礼拝所で他のムスリムと日常的に関わっており，ヒジャーブ脱衣に対してどう思われるかを心配していた。「ヒジャーブをはずしてもお祈りはしたい。でもモスク（礼拝所のこと）に行きにくくなっちゃう」と述べた。ヒジャーブに対する価値は変わったが信仰心がなくなったわけではないことが推察される。3 つ目は《SD 日本人への説明の面倒くささ》である。周囲の日本人が急にヒジャーブをはずしたことに驚き，理由を尋ねてくることを予想し，煩わしさを感じていた。最も大きな影響を与えたのは《SD 良いムスリムの見本として日本人に示したいという使命感》であった。さらに《SD ISIL[*4]に関するメディア報道》がこの使命感を助長した。A はヒジャーブをはずして本当の自分を見せたいと思う一方で，報道によって，ムスリム＝テロリストだと勘違いされがちな風潮を自分がなんとかしなければならないと感じていた。以下に語りを示す。

（ISIL の）報道が増えて，なんか日本の皆さんがイスラーム教嫌だなって，怖いなって思ってるかなっていう感じになった。それで「私がヒジャーブをかぶってムスリムの代表として，正しい生活，良い人，良いマナーを見せなくちゃいけない」ってやっぱり思ってきて。（中略）自分を見せたいけど，日本に来ていますから私の使命？ みたいな。（イスラーム教の）イメージを上げるために。

語りから「本当の自分」と「ムスリムとしてあるべき姿」との間で葛藤していることがわかる。A はどちらを日本人に見せるべきか決めかね，日本にいる間はヒジャーブ脱衣に至らなかった。

（2）帰国後から現在

《OPP ③ 母国に帰る》ことで《SG もう日本人に見本を示さなくてもいいという開放感》を得ていた。ヒジャーブ脱衣の意思が残っていた A は《BFP ② 神に脱衣について交渉してみる》ことにした。これが，行為変容（ヒジャーブをはずす）に至る 2 つ目の分岐点となり，さらなる価値変容が起こった。A は礼拝を通じて神と対話し，留学中ヒジャーブを被り続け，良いムスリムの姿を日本人に示してきたことを主張した。「もう役割を果たしましたので，頑張ったご褒美として（ヒジャーブをはずすことを）認めてくれませんか？ 」「あなた（神）を信じることは変わりません，私はムスリムだということは変わりません。でも自分を見せたい」と神に交渉したところ，【PS 頑張ったご褒美に神が意思（脱衣）を認め

*4 イラク・レバントのイスラム国（Islamic State of Iraq and the Levant）のこと。イラクとシリアにまたがる地域で活動するイスラーム過激派組織で，日本人拘束事件や世界各地でのテロ事件以降，日本での報道が増えた。主にネガティブな事件とともに報道されている。

てくれた】という（図 2）。これが価値と行為を変容させる契機となった。A は「**神様が認めてくれたので本当にすっきりしました**」「**もう迷いはないです**」と述べ，決意を固めた。同時に，ヒジャーブ着用の価値に【VTM ③ 自分を表現するもの】という新たな意味が加わった（表 2-③）。【VTM ② 本当の自分を隠すもの】と【VTM ③ 自分を表現するもの】は相反するように思えるが，180 度捉え方が変わったわけではない。A はヒジャーブの有無にかかわらず，その選択自体が自らを表すものだと捉え直していた。

> つけていることも my style，つけていないことも my style。（中略）つけるのは自分を隠しているわけじゃなくて，「つけたい」という自分を表現しているんだって思っています。今はね。

上記から，彼女にとっての my style は心情と行動が一致していることが前提であることがうかがえる。つまり，ヒジャーブを「つけたくないのにつけている」といった昔の A のような状況は想定にない。このように，神に《自分の意思を尊重してもらう》ことで《EFP 行為変容（ヒジャーブをはずす）》に至った。

このとき，ヒジャーブ脱衣を抑制する働きをしたのは《SD 家族の存在》であった。ヒジャーブをはずせば両親が驚き，日本留学を恨み落胆するのではないかと心配した。一方で《SG 母国の多様なムスリムの存在》はヒジャーブ脱衣に助勢した。日本ではムスリムがまだ少数であるため，ムスリムに出会うのは主に礼拝所で，そこには比較的信仰に厚いムスリムが国籍を問わず集まるという。それゆえ，他のムスリムからの視線を気にして，あるいは少数の中のムスリム代表として日本人への啓蒙を意識して，日本滞在中は信仰心が高まっていたと振り返る。「**A 国（母国）ではもっといろんな人がいます。ムスリマでもヒジャーブをかぶらない人もいるし，日本にいるムスリムより真面目じゃない人が多い**」と述べ，帰国後に見た多様性あふれる母国の雰囲気がヒジャーブ脱衣の心理的負担を減らしていた。

（3）2nd EFP 未来展望

2nd EFP とは，当人の目線でとらえられる EFP 以降の次なる展望・目的として描き出し得るものである（安田・サトウ，2022）。本研究ではヒジャーブ着脱にまつわる行為変容に焦点を当て，EFP を《EFP 行為変容する（ヒジャーブをはずす）》とした。だが，EFP に至った後の A にとっては着脱行為をどうするかは重要ではなく，《2nd EFP 自分の意思で自由に生きていく》ことがこれからの未来に目指すべき姿であることがわかった。そこで 2nd P-EFP を設定し，《2nd P-EFP 本当の自分を隠して生きる》とした。ここでいう「本当の自分」とは意思が着脱行為に反映された状態を指す。

> 心の声に従って，つけたくなったらつけます。はずしたくなったらはずします。私を見ればそれはわかるんです。私の心の中を行動に表して本当の自分を見せていくということかな。これから何があるかは分かりませんけど，そういう style で生きようと思っています。

一連の径路と価値変容の様相から，心の声に真摯に向き合い，戒律を理由にせず，自分の意思で行動選択していくことが A の目指すところであると考察できる。A にとっての《2nd P-EFP 本当の自分を隠して生きる》は，ヒジャーブの着脱に限らず，生き方の方針を示していると言える。

2. B の場合

（1）来日から帰国まで

留学生 B は幼少の頃から《ヒジャーブを着用》していた。B のヒジャーブ着脱の《EFP ① 行為変容（ヒジャーブをはずす）》に至るまでの径路を TEM 図（図 3）に，価値変容過程を TLMG 図（図 4）に示す。また，TLMG の第三層における価値・信念とそれに関する語りの詳細を表 3 に記す。

B が来日前および来日初期に抱いていたヒジャーブに対する価値は【VTM ① 異性から身を守るためのもの】であった。着用の理由は「**男性から見られないように**」，「**目立たないように**」であったという。B はヒジャーブを「**つけることが習慣なので，つけないと変な感じがする**」と述べる。B にとってヒジャーブ着用は自然なことだと捉えられていた（表 3-①）。

《OPP ① 日本に留学する》と《OPP ② 日本人からヒジャーブの着用について質問される》ことが何度かあったが，その都度《宗教的な観点から説明》を行っていた。母国の文化を紹介するイベントでヒジャーブについて話す機会も多々あったという。説明しているうちにヒジャーブの《BFP ① 着用理由に矛盾を感じる》ように

図 1　A のヒジャーブ着脱行為の変容過程の TEM 図

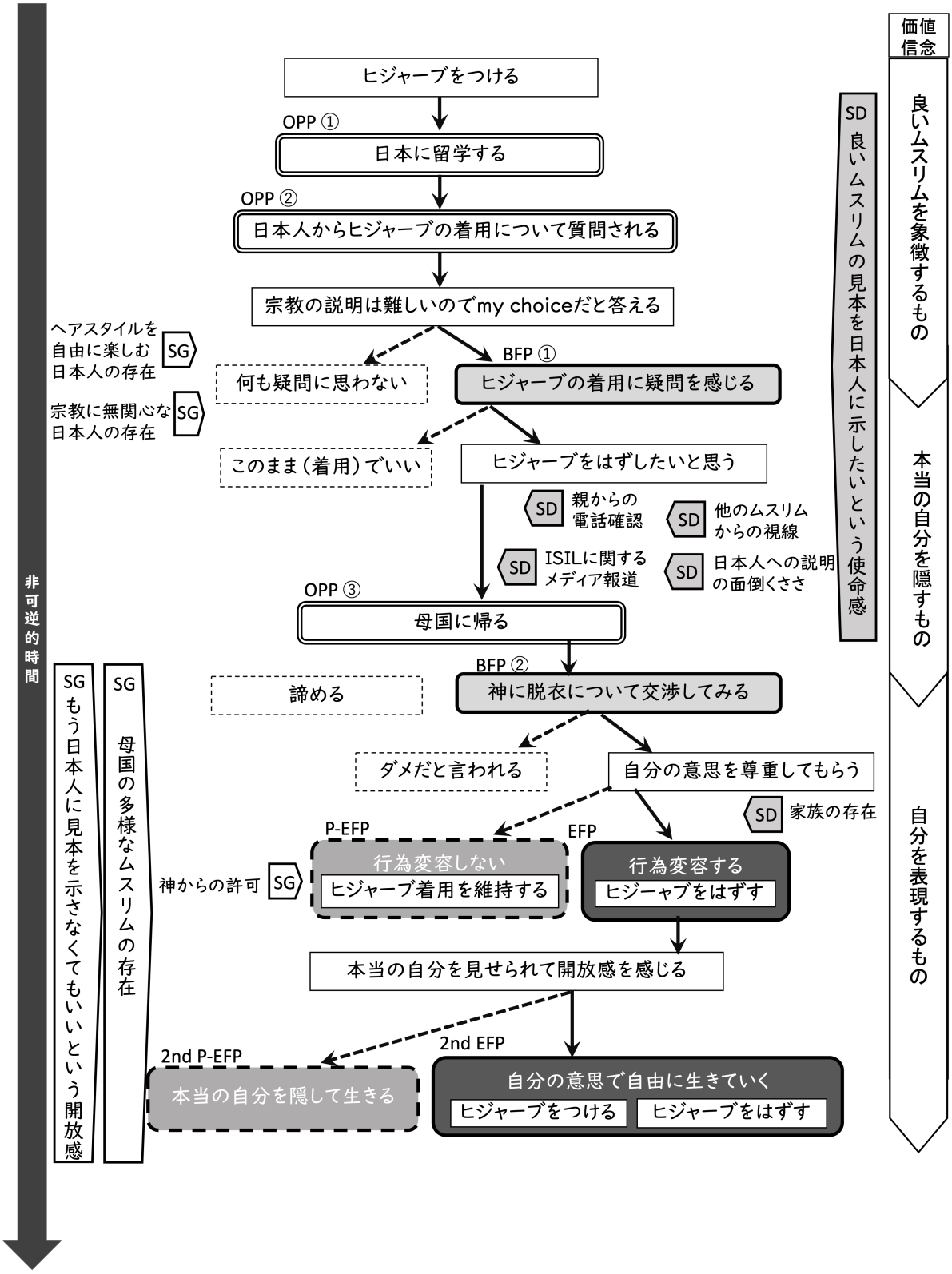

図 2　A の価値変容プロセスの TLMG 図

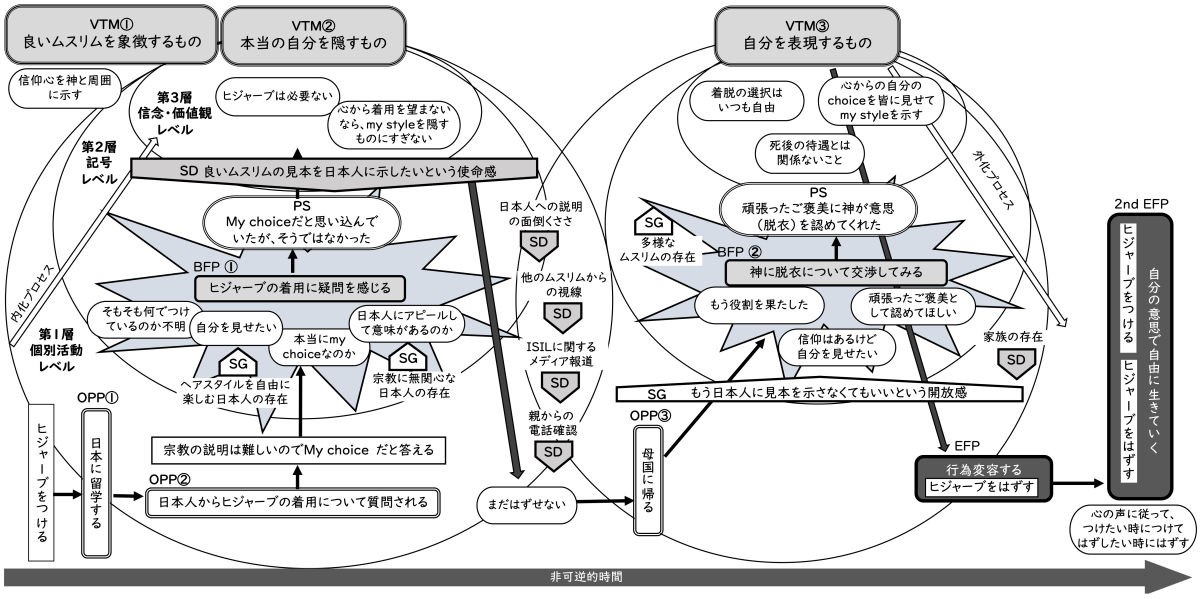

表 2　A の VTM についての語りの詳細

価値・信念	語りの詳細	番号
VTM① 良いムスリムを象徴するもの	その時（来日前）ヒジャーブをかぶるの意味はやっぱり，良いムスリムを示す，象徴するためですよね。周りの皆さんに「自分はちゃんとしたムスリムですよ」って知らせるためのものなんです。話さなくても見ただけでわかるでしょ。いい人なんだって。	(①)
VTM② 本当の自分を隠すもの	ヒジャーブは必要ないかもしれないです。心から被りたいって思わないならつけなくてもいいんじゃないですか。それはmy styleを隠すだけ。Freeじゃなくて本当の自分を隠すためのものみたいになっているなって思ってた。もし，今の私（ヒジャーブを必要ないと思っている私）がかぶったら，それは嘘をついているか，本当の自分を見せないためにかぶるものです。今の私にとって，ヒジャーブはただ，自分を隠すものです。隠したいならつけるといいけど・・・。	(②)
VTM③ 自分を表現するもの	前に，自分を隠すと言いましたよね。なんか，同じようで違う気持ちもあります。むしろ自分を見せるための手段だという気持ち（もある）。つけてもいい，はずしてもいい，いつでも自由に選択できる。自分のchoiceを皆に見せられるんです。ヒジャーブのおかげです。これがmy styleなんだよって。つけていることもmy style, つけていないこともmy style，好きなヘアスタイルも見せていいんです。ヒジャーブをつけるということは悪い（意味）だけじゃない，それも自分を示すものですよね。今はちょっとポジティブな考えがあります。（中略）別にそれで天国に行けるかどうかは関係ないです。信じる心はありますから。	(③)

なった。幼少期からヒジャーブをしなければ周囲から注目を集めてしまうと教えられ，日本人に対してもそう解説してきたが，「日本では誰も自分を見ていない。むしろヒジャーブをかぶっているほうが目立つのではないか」と矛盾を感じるようになった。こういった日本人による《SG 周囲の視線》や，《SG 自立している日本人女性の姿》，《SG 日本の夏の蒸し暑さ》がBのヒジャーブ脱衣を助勢した。Bは日本人を見て感じたことを次のように語る。

> 自分の体は自分で守るんだって発見しました，日本人の女性を見て。（日本では）子どもだって自立して一人で歩いています。もちろんスカーフはつけていませんね。普通の生活で女性がスカーフなしで一人でスーパーに行っても問題ないんです。危険なことはない。みんな周囲を恐れず堂々としていると感じました。まさに自立ですね。

こうして【PS ヒジャーブで身は守れないのではないか】という気持ちが沸き上がり，それが促進的記号となって，ヒジャーブを【VTM ② 無意味で邪魔なもの】と捉えるようになった。Bは「ヒジャーブではなく自分自身で身を守るんだ」と考え，ヒジャーブは「どう考えても邪魔」，「着用する意味がない」と結論づけた（表3-②）。ただし，実際にヒジャーブをはずそうとすると，《SD ヒジャーブをつけないと変な感じ》がしたり，日本での非着用が母国政府に知られた場合の《SD 脱衣による懲罰への恐怖》を感じたりして躊躇した。Bの母国では国策により女性のヒジャーブ着用が義務付けられている。違反した場合は懲罰を受けるというが，母国にいたときや来日初期はヒジャーブをはずすことを想像したこともなかったため，懲罰を恐れることもなければ，政府からの圧力を感じたこともなかったという。ヒジャーブに対する価値・信念が揺らぎ，脱衣しようと試みたときに初めて恐怖感を抱いた。新たな価値・信念と行為実行の間で葛藤を繰り返したすえ，《EFP ① 行為変容する（ヒジャーブをはずす》に至った。脱衣後，《SD 周囲からの無反応》に《開放感を感じ，脱衣の正当性を実感》した。

> 実際スカーフをはずしてみたら，全然誰も見てこなかった！ ははは。日本人からは「お，今日はしてないの？ いいね」という感じで（言われて），全然びっくりしてなかったです。私の選択は間違いなかった，正解だったと思いました。だって本当に邪魔なものだったから。涼しいし，快適だし，素晴らしいし，自由だと感じましたね。自立している感じ。

ヒジャーブをつけないことの違和感は消えたが，母国に知られたらどうしようかという緊張感は完全に消えることはなかったという。

（2）帰国後から現在

Bの場合《OPP ③& BFP ② 母国に帰る》とまた《EFP ② 行為変容する（ヒジャーブを再びつける）》ようになる。SGは行為変容を助勢する働き，つまりこの地点からは「ヒジャーブを再びつける」ことを促す働きを指す。反対にSDはそれを抑制する，つまり《P-EFP ② 行為変容しない（ヒジャーブをはずしたまま）》の方に働く力となる。帰国後，再び着衣へと促したのは《SG 脱衣による懲罰への恐怖》と《SG 周囲からの視線》であった。

興味深いのはOPPである《OPP ③& BFP ② 母国に帰る》ことがBFPにもなっていることである。これは「（母）国に帰らなかったら，また（ヒジャーブを）つけることはない（なかった）」という語りに依拠する。

TLMG（図4）による価値の変容を見てみると，第二層において「さすがに母国ではつけないとまずい」，「懲罰があるのでつけないという選択肢はない」，「環境（状況）が変わったので，もう割り切るしかない」といった【PS ヒジャーブをつけなければ罰せられる】という認識が【VTM ③ 懲罰から身を守るためのもの】という価値を新たに発生させていることがわかる。ただし，これは価値が完全に変容したのではなく，根本的な価値は変容しないまま，新たな価値が加わっているという点に留意したい。具体的には，ヒジャーブは【VTM ② 無意味で邪魔なもの】という帰国前に抱いていた価値・信念は維持しつつも，「安全のため」という新しい意味づけが加わった。このことは「これ（ヒジャーブの着用）はただ国からの懲罰を逃れるためだけのアクション（行為）」，「異性から身を守るのは自分自身」という認識（図4）や，「考え方は変わってないと言えます。（中略）（母国でヒジャーブをつけるのは）100％安全のためです」，「（ヒジャーブの着用に）意味がないと思っているんですけど，価値がないって，実際に」という語りに裏付けられる（表3-③）。

こういった思いから，Bは帰国と同時に《EFP ② 行為変容する（ヒジャーブを再びつける）》に至った。つまり，根本的な価値の変容はないものの行動は変容したことになる。BのTEM図（図3）で右端に記載した価値

信念を表す矢印の重なりは，もともとの価値を維持しつつも，新しい価値が加わったことを示している。TLMG 図（図 4）の VTM ②と VTM ③の重なりも同様である。B はヒジャーブを【VTM ② 無意味で邪魔なもの】と思いながら着用していたが，心理的葛藤はみられなかった。《SG 脱衣による懲罰への恐怖》と《SG 周囲からの視線》の影響があまりに大きく，着用するかどうかを迷う余地もなかったものと思われる。これは「**帰国したら自動的にスカーフを被ります**」という語りにもみてとれる。また，新たに加わった【VTM ③ 懲罰から身を守るためのもの】という意味づけが，「ヒジャーブは無意味であるにもかかわらず，着用しなければならない」という認知と行動の間の齟齬を解消したと推察される。この意味づけは葛藤に対するある種の対処方略として機能した可能性もある。留学前と同じ環境（イスラーム思想の強い母国）に戻ったとき，ヒジャーブを着用することは同じであるが，その意味づけは変わっている点が興味深い。日本留学前の「**ヒジャーブをつけないと危ない**」との認識は，政府による懲罰への恐れを意味するのではなく，異性から注目を浴びてしまうことへの恐れを意味していた。実際，B はヒジャーブをはずそうという発想を得るまで，国からの懲罰を意識したことはなかったという。「安全のため」の着用は，留学前後でその意味が異なっていることがわかる。

（3）2nd EFP 未来展望

B にとっての 2nd EFP を《2nd EFP 状況に合わせてベストな選択をしていく》とした。反対に 2nd P-EFP は《2nd P-EFP 状況によらず行動の一貫性を保つ》である。B は以下のように，現実を踏まえた将来への展望を語っている。

> これから日本にまた行くかもしれないし，ここ（母国）にずっといるかもしれないし，わかりません。でも状況によって一番いい，ベストだと思うことを選びます。状況にあわせて。本当はどこでも，私がしたいようにできるならそれがいいです。でもそれは私にとって現実的ではないでしょう。（中略）ですから一つの考えにこだわらないで，状況に合わせて，相手に合わせて，自分の気持ちに合わせてベストな選択をします。私ならできる，その力を今持っていると思います。日本（留学）のおかげさまです。

日本での価値・行為の変容の経験を通じで自己効力感が高まり，未来の自分に期待していることがわかる。

3. C の場合

（1）来日から帰国まで

C は来日前《ヒジャーブをつけない》でいた。C にとってヒジャーブ着用は周囲の人に対して【VTM ① 一人前のムスリムであることを示すもの】であり，非着用の理由は，自分の宗教がイスラーム教だと認めて示す「**覚悟がまだなかった**」からだという（表 4-①）。この段階では，C は「いつかはムスリムとして一人前になること」を最終目標として想定しているわけではなかった。以下の語りからそのことがわかる。

> ムスリムの家に生まれたから，一応ムスリムとして生活しています。でも，将来は自分がどの宗教を選ぶのかまだわからないなと思っていました。（自分の宗教を）イスラームにしましょうと，それを決めたなら，ヒジャーブをつけます。

こういった考えのもと，ヒジャーブは宗教的な祭りや学校行事で必須の場合のみ着用していた。ヒジャーブ非着用から始まる C の径路の EFP は《EFP 行為変容する（継続的にヒジャーブをつける）》と設定した。C の行為変容を中心に捉えた TEM 図を図 5 に，TLMG を用いた価値変容過程を図 6 に示す。

《OPP ① 日本に留学する》とすぐに指導教員を含め研究室の《OPP ② 日本人からヒジャーブの（非）着用について質問され》た。これは C をムスリムだと聞いていたのにヒジャーブを着用していないことを不思議に思っての質問であった。C は，自分の考えに従って《まだムスリムとして半人前だからだと答え》た。幼い頃より親から「ヒジャーブを一度かぶるなら一生かぶるように」との教えを受けており，ヒジャーブ着用には覚悟が必要だと感じていた。C はヒジャーブを着用してはいなかったが，イスラームの教義に従い，毎日の礼拝や飲食の制限を守っていた。大学近辺にある礼拝所にも出入りし，他の国のムスリムと交流していた。研究室には他に留学生はおらず，研究室仲間は食事に行くたびに C に対する配慮をみせたという。例えば食事する店を豚骨ラーメン屋ではなく，うどん屋に変えるなどである。C は配慮に感謝しつつも，申し訳なさを感じるようになった。これ

図 3　B のヒジャーブ着脱行為の変容過程の TEM 図

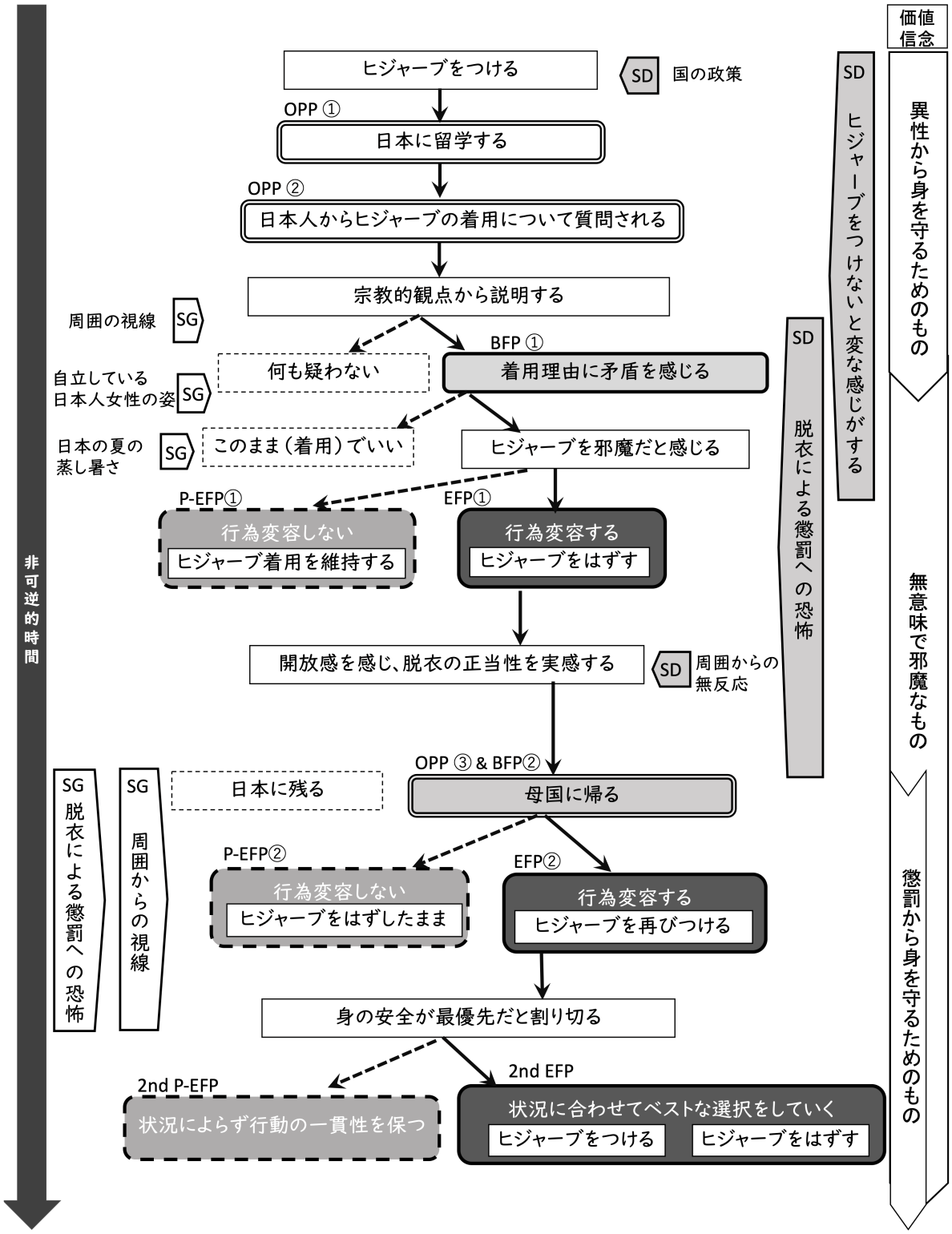

図 4　B の価値変容プロセスの TLMG 図

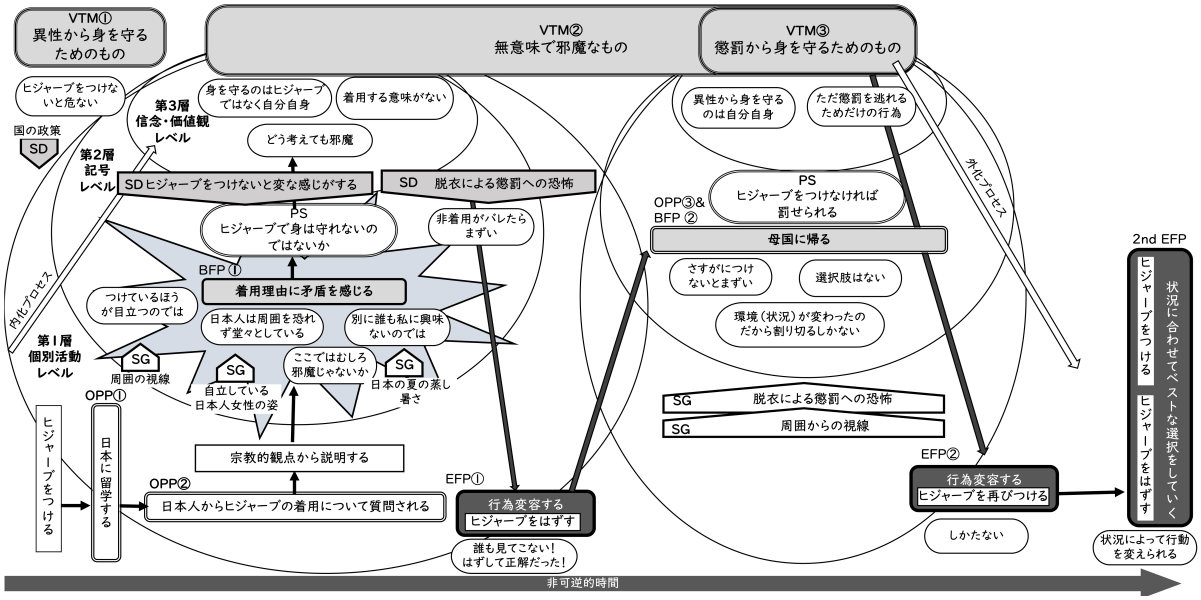

表 3　B の VTM についての語りの詳細

価値・信念	語りの詳細	
VTM① 異性から身を守るためのもの	B国（母国）にいるときは，スカーフ（ヒジャーブ）をつけるのが普通だったんです。つけないほうが変。つけないというアイディアを思いついたことはない。もし，つけないなら国の政策で罰せられて牢屋に入ります。ずっと男性から見られないようにと，目立たないように（つける）と教えられてきましたから。つけないとき，男性から何か危ないことをされたら，つけないほうが悪いです。ヒジャーブをつけないことは本当に危険なことです。習慣になっているというのもありますけど，一番ぴったりくる（意味）は，男性から自分を守るためにつけていたということです。B国のルールもありますけど,日本に来る前はそれは怖くなかったです。ヒジャーブをはずすことは１％も考えたことがなかったですから。	(①)
▼ VTM② 無意味で邪魔なもの	（ヒジャーブ着用には）意味がないです。ただ邪魔，どのように考えても邪魔だと言えます。異性から自分を守る効果があると信じていましたが，ここ（日本）でそんなことないでしょう，さっきも言った通り。誰も見てないですから。自分の体は自分で守るんだって発見しました，日本人の女性を見て。子どもだって自立して一人で歩いています。もちろんスカーフはつけていませんね。（中略）夏は暑いじゃないですか，日本は特に湿度が高くて，みんなから暑くない？と聞かれます。何でつけているんだ？って。無意味。	(②)
▼ VTM③ 懲罰から身を守るためのもの	（ヒジャーブ着用に対する）価値観は，考え方は変わっていないと言えます。でも，今，ここ（母国）でつけているんですけど，それは100％安全のためです。もし，つけなかったら政府が私を牢屋に連れて行きます。家族もいますし，そんなことをされるわけにはいきません。ヒジャーブはセーフティーネットです。意味がないと思っているんですけど，価値がないって，実際に。でもここでは重要です。特別な意味はないけど，安全のためつけます。	(③)

が TEM 図の《飲食の制約により対人関係に影響が出てくる》である（図 5）。ある日，《飲食に関する戒律遵守の基準を緩める》契機となる出来事があった。研究室で BBQ をした際，皆が豚肉と鶏肉が混ざらないよう C のために配慮した。だが，その配慮は完璧ではなかった。C は混乱したが，気遣いに応えるため，それを食べることにした。そのときの気持ちを以下のように語る。

> 先生や皆さんが「はいはい，C さん食べてね〜。豚肉と鶏肉を分けて焼いたからね」と言ってくれて，でもそれって，本当はハラールじゃない。（豚肉と鶏肉を）同じ鉄板で焼いてるし，たぶん鶏肉もハラールのものじゃない。ん〜どうしようかなと思って。皆さんの親切を受けたい（応えたい）し，好きだし。葛藤しました。それで，よし食べよう！ となった。（中略）ここで厳密にイスラームのルールを守ると食べるものがないですよ。少なくとも日本人の皆さんと一緒に食べるとかできない。研究室は勉強に関係があるので，皆さんとできるだけ一緒のことをしたい。

《飲食に関する戒律遵守の基準を緩める》ことで生活しやすくなった反面，罪悪感や死後の待遇への不安も感じるようになった。そこで C は《BFP ① 神に相談する》ことにした。これが《EFP 行為変容する（継続的にヒジャーブをつける）》に至る分岐点となる。相談の中で神からヒジャーブ着用への導きがあったからだ。C は神に「戒律をきちんと守れなくて申し訳ない」，「日本人の皆さんの優しさに応えたい」，「何か償いにできることはないでしょうか」，「このままで天国に行けますか」などと葛藤する自分の気持ちを吐露した。神との対話の中で【PS 飲食の戒律を守れない代わりにできることをやろう】という思いが沸き，《償いのためのヒジャーブ着用を決める》。C は以下のように語り，ヒジャーブ着用による償いが神からの導きであったことを強調する。

> （ヒジャーブ着用は）誰のアイディアだったかな〜。なんか神様に相談してて，神様がアドバイスくれたか，自分で思いついたか忘れたけど，「そうか，代わりにやれることをやりましょう」って急に（思った）。神様が導いてくれて。神様のおかげですよね。

こうして C のヒジャーブ着用の価値は【VTM ① 一人前のムスリムであることを示すもの】から【VTM ② 罪悪感を減らすための償い】へと変容した。ただし，価値の変容から行為変容までには少し時間がかかった。《SD 「着用するなら一生継続する」という親との約束へのプレッシャー》が行動を抑制した。加えて，突然スカーフを被り始めることに対する《SD 日本人の反応への不安》もあった。

> 日本人の皆さんに「私はまだ一人前のムスリムじゃないので」とずっと言っていたので，急に私がヒジャーブをかぶって行ったら，「え，C さんどうしたの？ 急に一人前になった？」ってびっくりするかなと思って。でも「あなたたちのためですよ」って本当の理由を言うのは面倒くさいし。今までよりももっと，ムスリムとして気を遣われるかもしれないというのもあったんですよね。

一方，《EFP 行為変容する（継続的にヒジャーブをつける）》を促したものがいくつかあった。まず，《SG 戒律を正しく守られていない罪悪感》とともに最も影響したのは，《SG 他のムスリムからの指摘と期待》である。C は礼拝所で出会う他のムスリムとよく議論し，特に戒律遵守に厳しい国から来たムスリマ留学生の影響を強く受けていた。

> X さん（中東出身のムスリマの友達）から，よく「C さんその服装はよくないよ。いつヒジャーブしますか？ 」と言われてたんですよ。イスラーム教についても彼女は詳しくて教えてくれて。すごく（私に）期待している感じだった。まあ，だからいつか，覚悟が決まればかぶろうという気持ちはあったのかもしれない。

償いの有無にかかわらず，ヒジャーブ着用について考える機会があったことがわかる。さらに《SG 神からの後押し》と《SG ISIL に関するメディア報道》も EFP を助勢した。また，A 同様，C も報道によるムスリムのイメージ悪化をなんとかしなければという使命感を抱いていた。

《着用のタイミングを模索する》中で《SG イスラームのお祭り》を機に《EFP 行為変容する（継続的にヒジャーブをつける）》に至った。C は「イスラームのお祭りがちょうどあって。（他のムスリムの）皆がお祭りでヒジャーブをつけるの？ って冗談を言ってきた」ことを好機と捉え，ヒジャーブをつけ始めた。C はこのときの心境を以下のように振り返った。語りから，ムスリムとしての覚悟が決まったわけではないこと，これまでとは異なる意味づけでヒジャーブをかぶり始めたこと，こ

の時点では帰国後の着用について決めていなかったことがわかる。

> けっきょく，このときすぐに「一人前のムスリムです」と皆さんに示す覚悟はなかった。次，C 国に帰るときに，はずすかもしれないなあって。でもとりあえず，償いのためにできることをやろうって。（このときのヒジャーブ着用に）自分の意思を伝える意味はないので，まだ，周りの人に一人前のムスリムになると決めましたよ（と示している）とは思われたくないけど，しかたないです。私だけのスカーフの意味はこの時は前と違いますよ。でも，神様が（この段階における着用の意味を）わかってくれているから。償い（の意味）だって。まあいいということで。帰るときのことは後で考えましょうと（思っていた）。まだ 1 年以上先のことだ（った）し。

着用後，メディア報道の影響で，見知らぬ日本人から《SD ムスリムへの偏見と心ない言葉》を受け，脱衣したくなることもあったという。雨具のフードをかぶってヒジャーブ姿を隠したこともあったが，そういった経験を繰り返して自問自答していくうちに，《ムスリムの代表として見られることを覚悟する》ようになった。

（2）帰国後から現在

《OPP ③& BFP ② 母国に帰る》ことで《SD 償う必要性の消失（豊富なハラールフード）》が起こったが，再び行為変容する（ヒジャーブをはずす）ことはなかった。《SG 親との約束（一貫性の保持）》と《SG 信仰心の高まり》がヒジャーブ着用の維持に大きく影響したため，着脱をめぐる葛藤はみられなかった。行為の変容はなかったが，《OPP ③& BFP ② 母国に帰る》という状況の変化が分岐となり，価値の変容を自覚した（図 6）。C は「もう飲食の戒律は守れるので償う必要はなくなったけど，（母国に）帰ったときは，なんか違う意味でつけようと思った」と述べ，「あれ（償い）はただのきっかけだった」と振り返った。【PS もう償いは必要ないが，つけるのが普通になった】と実感し，ヒジャーブ着用は【VTM ③ ムスリムとして当然のこと】との意味づけに変わった。償いのためにヒジャーブをつけているのではなく，ムスリムとして当たり前の行為だからつけているのだと言い切り，価値・信念と行為の一致を自覚していた（表 4-③）。《本当のムスリムになったと実感する》様子もみてとれる。償いのためにとヒジャーブをつけて生活していくうちにイスラームの教えに同意し，ヒジャーブ着用はムスリムとして当然の行為だと潜在的には思っていた可能性を含むものの，ヒジャーブに対する捉え方が変わったことを明確に実感したのは帰国時であった。そのため，BFP ② は《OPP ③& BFP ② 母国に帰る》であると解釈した。解釈の根拠となった語りは以下である。これは「いつからヒジャーブの着用を当然のことだと思うようになったのか」という問いに対しての語りである。

> 正直いつかわからない。たぶん，罪悪感をなんとかするためにつけていて，そのうちに（ヒジャーブを）つける本当の意味をコーランを読んで賛成して，つけていたんだろうと思うけど，日本にいる間は，C 国に帰るときにどうするかは後でちゃんと考えようと思っていました。もちろん両親との約束とか（の影響）も大きかったけど。やっぱり，あ，スカーフ（ヒジャーブ）をつけるのはもう償いの意味じゃないねってはっきり思ったのは，決めたのは，帰るときかな。だってもう償う必要はないじゃないですか？ 食べ物のことを気にする必要ないし。

《SG 親との約束（一貫性の保持）》の影響もあり，ヒジャーブをつけ始めたこと自体が帰国後の着用維持を促した可能性も考えられる。

留学前後のヒジャーブ着用に対する価値の違いにも注目したい。来日前に抱いていた《VTM ① 一人前のムスリムであることを示すもの》は，親や周囲の人に対して自らの信仰がイスラーム教であることを完全に認めていることを示す意味合いをもっていた。それに対して，帰国後の《VTM ③ ムスリムとして当然のこと》は，周囲へ信仰自認を示すものではなく，「美を強調しないために身を隠さなければならない」というイスラームの教えに同意したうえで「だから被るのは当然」だと捉えられている。以下は，「ムスリムとして当然というのは，具体的にどういう意味か」「一人前のムスリマになったということか」，「以前（VTM ①）との考え方の違いはあるのか」という筆者の問いに対する語りである。

> 当然というのは，つける理由をムスリムとして理解していますから，当たり前だと言いました。なぜつけるかは，それはコーランに書いてあって，女性は美しさを隠さなくてはいけません。それだけでなくて，ハディース（預言者ムハンマドの言行録）にもいろいろ書いてて，深い意味があるので，それに賛成して，つ

けるのは当然って感じ。

一人前のムスリマになったと言えます。でもさ，前（VTM ①）のは，私にとっての意味はさ，周りの皆さんにアピールするものというのがメインな感じ。今は真の意味を理解して「（ムスリムとして）当然のことですから」という感じ。誰かにアピールするものじゃない。

VTM ③ではヒジャーブは他人に何かを示すためのものではなくなっている。C はこの価値の変容について，「もし日本に留学していなかったら，今（帰国後の現在）もまだスカーフ（ヒジャーブ）はつけてないでしょう」と語り，その理由を以下のように振り返っている。

もともと「一人前のムスリムになりましょう」というのがゴールというわけじゃなかったので。それはヒジャーブに対する考え方，私にとっての意味だったけど，ゴールではなかった。いつかスカーフ（ヒジャーブ）をつけなきゃと思ってはいなかったから。私は将来どんな宗教を選択するのかな？ たぶんヒジャーブをつけないだろうなって（思っていた）。予想で。だからまだ一人前じゃないと言って（いた）。

この語りから，C にとってヒジャーブ着用は将来必ず通るものと想定されてはいなかったことが読み取れる。帰国後の着用は，来日前にもっていた価値観に沿う形で実現したというわけではないと解釈できる。つまり，帰国後のヒジャーブ着用維持はムスリムにとっての自然な成長による産物ではなく，異文化・異宗教下における環境でヒジャーブ着用の意味を能動的に問い直していく営みの中で，価値変容のすえに辿り着いたものと考えられる。

（3）2nd EFP 未来展望

C にとっての未来展望は《2nd EFP 正しいムスリムとして生きていく（ヒジーャブをつけ続ける）》である。反対に 2nd P-EFP を《2nd P-EFP 半人前の状態で生きていく》とした。C は一連の過程を通じて半人前から一人前のムスリムに成長したと認知していた。調査時現在は来日当初よりも信仰心が高まったと言い，布教活動も行う。

今はもうヒジャーブを被りますとか，被りませんとか，そういうことで葛藤するのはないです。そういう問題ではなくて，ただ，正しいムスリムとして最後の審判の日まで生きましょうということだけ。（中略）ヒジャーブでいえば，はずすことはないですね。コーランの内容は変わることはないので。

今後も現世の限りは正しいムスリムであることを指針に生きることを目指していることがわかる。

総合考察

1．着脱行為と価値・信念のずれ

本研究では，在日ムスリマ留学生のヒジャーブ着脱にまつわる行為と価値の変容を解明するため，TEA を用いた包括的なアプローチを行なった。宗教の教義により定められた価値観や行動様式を持つムスリムの場合，行為と価値が必ずしも直結しているとは限らない可能性がある。そのため，本研究では TEM 図の EFP を《EFP 行為変容する》と設定し，具体的な行動に焦点を当て，非可逆的時間軸に沿った経験の径路を描きつつ，TLMG を用いて価値の変容に焦点を当てた。HSI を用いた調査協力者の選定においては，「留学前後でヒジャーブをはずすようになった者」あるいは「つけるようになった者」のどちらかに限定することはせず，「着脱行為の変容を経験した者」を招待した。本研究の主眼が，ヒジャーブ着脱の是非ではなく，戒律にまつわる行為や価値を変えられないことを前提とするムスリムが「どのように変容するのか」に焦点を当て，それに影響する状況や心情を見出すことに置かれたためである。

分析の結果，3 名の多様な着脱行為変容に至る径路と価値の変遷が見出された。さらに，必ずしも行為が価値を直接反映しているわけではないことが明らかになった。例えば，ヒジャーブは不要で本当の自分を隠すものだと意味づけながらも行為変容に至らず，ヒジャーブ着用を維持していた A（BFP ①-EFP）や，無意味で邪魔なものだと思いつつ，懲罰から身を守るためには仕方がないとヒジャーブを着用する B（BFP ②以降）には価値と行為に乖離がみられる。ただし，こうしたムスリマ留学生の行為は他者からみると本人の真意とは異なって見

図 5　C のヒジャーブ着脱行為の変容過程の TEM 図

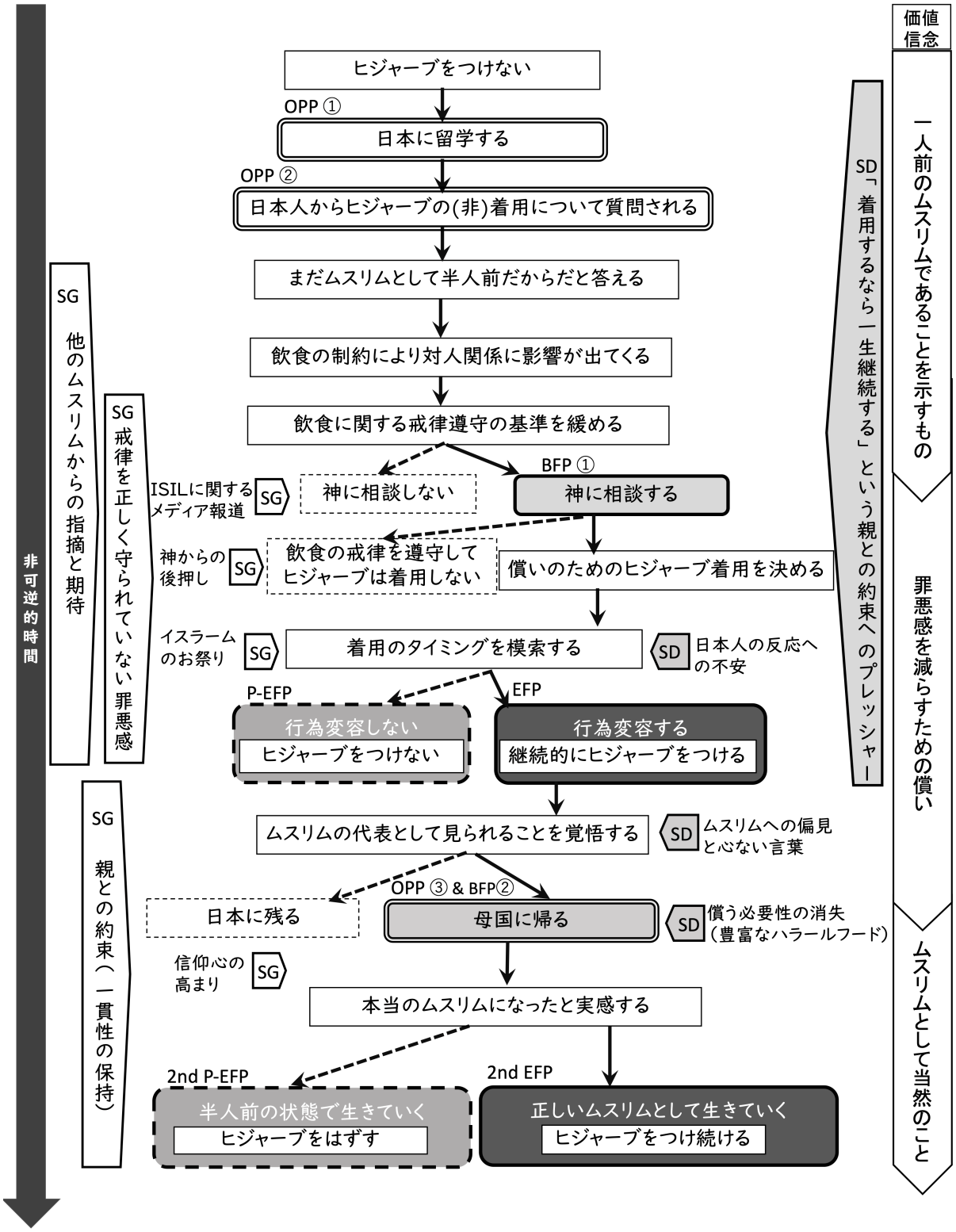

図 6　C の価値変容プロセスの TLMG 図

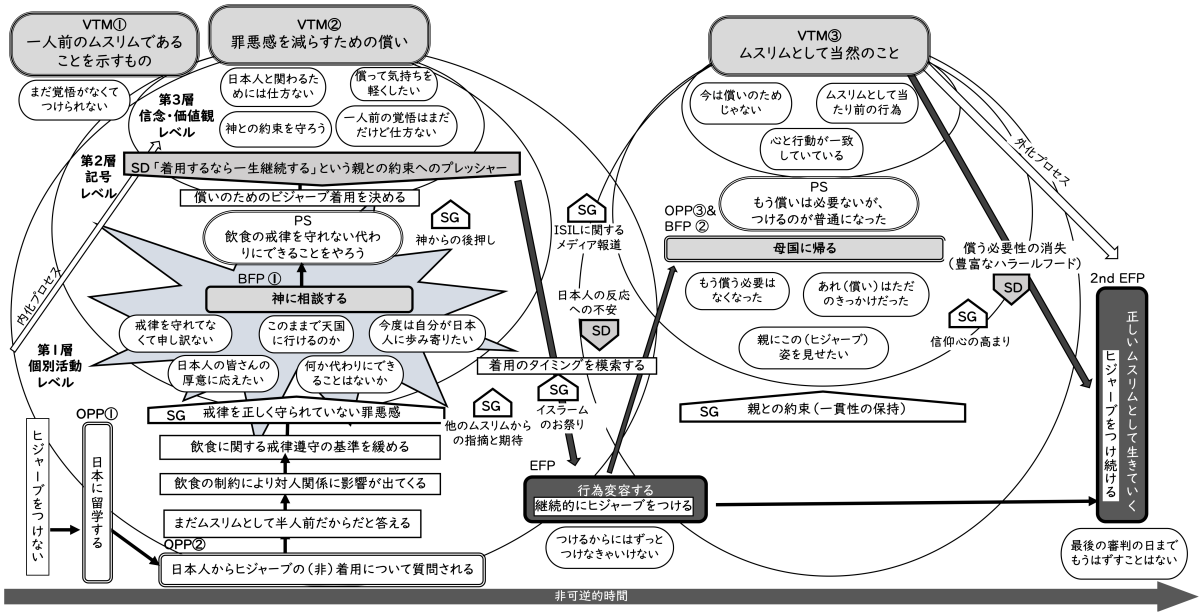

表 4　C の VTM についての語りの詳細

価値・信念	語りの詳細	番号
VTM① 一人前のムスリムであることを示すもの	ヒジャーブをかぶるのは，一人前のムスリムという意味があって，私はまだそんな覚悟がまだなかったのでしませんでした。ヒジャーブは私にとってそういう（一人前の）証明するものって感じてた。	(①)
VTM② 罪悪感を減らすための償い	（ヒジャーブ着用の）一般的な意味は宗教的にいろいろあるけど，私にとっては神様と約束したし…まずは償うために（かぶってた）。研究室の皆さんと一緒にご飯行ったり，仲良くしたいけど心は罪悪感は，どんどんどんどん溜まっていって，何とかしたい，この気持ちを。それで，はい，スカーフをかぶろうかって。（中略）一人前の覚悟はたぶんまだだったけど，とりあえずやれることをやろうと思った。償いの気持ちを神様にも見せて，罪とか，一番は罪の気持ち，罪悪感を減らそうと思った。	(②)
VTM③ ムスリムとして当然のこと	今は，もうそういう（償いのためというような）変な理由はないですね。こっち（母国）に帰ったら，別にハラールの食べ物もあるので，人付き合いでどうのどうのという問題もないですよね。あれからずっと（ヒジャーブを）つけてるんですよ。両親と約束したので，もう今は「ムスリムとして当たり前でしょ」という感じ。ヒジャーブについてどう思っているか？と聞かれたら，「神様が決めた，ムスリムとして当然のことですから」と答えますね。ヒジャーブをかぶっているのは自然のこと，特別じゃない，他の理由もない。心と（行動が）一緒な感じですね。一致しているという。	(③)

えることが多い。多くの人は，行為はその人の価値を直接反映しているものだと考えがちだからである。この仮説は行為と価値が記号を介さず直結しており，「行為–価値の二層モデル」と称される（サトウ，2022，2023）。本研究のムスリマ留学生に置き換えるなら，ヒジャーブ着用は信仰心の表れと捉えられ，脱衣行為は信仰心の薄れを表していると一様に解釈されてしまう可能性がある。このような決めつけは日本人によるムスリムへの不適切な対応を引き起こしてしまう。実際に，ヒジャーブを着用すべきかどうかは，イスラーム教内部の教義解釈の問題であるにもかかわらず，非イスラーム諸国では人格判断の基準にまでなっている側面があるという（飯山，2019）。本研究の留学中の A や，帰国後の B のヒジャーブ着用は宗教的な意味を持たず，また，留学初期（EFP 以前）の C はヒジャーブをつけていないからといって信仰心が乏しいわけではなかった。むしろ戒律を忠実に守れないことに罪悪感を持ち，苦しんでいた。帰国後にヒジャーブをはずした A も信仰心は消失しておらず，死後の待遇を気にかけている。ヒジャーブの着用理由は個人や環境によって異なり，着用者の全てがイスラーム主義者というわけではないこと，イスラームに対する解釈自体も多様化していることは，森山（2015）でも指摘されているが，ここで記述されている多様化という表現は個人間（ひとそれぞれ）の多様さを意味している。個人内に渦めく複雑な思いや葛藤，そのメカニズムについては言及されておらず，対応への示唆も乏しい。そこで，発生の三層モデルを用いて，ムスリム留学生の行為・記号・価値を階層的に理解することが重要となる。つまり，個別活動（第一層），記号（第二層），信念・価値観（第三層）の 3 層で捉え，行為と価値を媒介する記号が何かに目を向けることで，個々の行為の裏に隠れた価値に気がつき，理解が深まるのではないだろうか。こうした理論的な営みを通じて，ヒジャーブの着衣・脱衣の 2 側面ではなく，異文化接触場面における当人の多様な在り方を発見し，読み解くことが可能になる。

ヒジャーブの着脱が必ずしも本人の信仰心を表すものとは限らないという発見や行為と価値が常に一致しているわけではないという知見は，見た目や振る舞いによってステレオタイプ的に見られがちな在日ムスリムの多様な生き方の提示に寄与するだけでなく，在日ムスリムを受け入れる人々の理解を多様にすることにも寄与する。また，非可逆的時間軸の中で行為と価値の両面を包括的にみていったことで，価値が行為に反映される場合でも必ずしも即時的に表れるわけではないことが明らかになった。TLMG にみられた意味づけの再考や状況の変化により，時間差で一致する場合もある。その行為を瞬間的なものとして切り取らず，当人の置かれた文脈と経験の積み重ねの中で捉えることの重要性も指摘できる。

2．3 名の TEM 図の共通点から見えてくること

3 名とも 3 つの必須通過点《OPP ① 日本に留学する》，《OPP ② 日本人からヒジャーブの（非）着用について質問される》，《OPP ③ 母国に帰る》が見られ，共通していた。《OPP ① 日本に留学する》と《OPP ③ 母国に帰る》は，OPP のバリエーション（安田・サトウ，2022）にならい，制度的 OPP として設定した。つまり，本研究の調査協力者が留学という制度上，皆経験する事柄と捉えた。一方で，《OPP ② 日本人からヒジャーブの（非）着用について質問される》は結果的 OPP，つまり EFP に対して必須性をもつと分析過程で関連づけられた事柄を指し，意図せず浮かび上がったものである。インフォーマント A と B の TEM 図および TLMG 図からは，日本人への質問の回答が BFP，つまりヒジャーブ着用の価値を問い直す契機を生起していることがわかる。これまで深く考えたことがなかった事柄についてアウトプットする営みが刺激となり，自己の価値・信念への振り返りを促した。そしてその過程で自らの本音に気がついた。日本人による質問はヒジャーブ着脱行為と価値の変容過程において自己の問い直しを促す 1 つの鍵となり得る。

行為変容に影響する SD・SG にも共通するものがあった。「周囲の日本人の反応」，「他のムスリムの存在」，「日本人女性の姿」，「親の存在」，「ムスリムに関するメディア報道」，「神の存在」である。本研究のムスリマたちが，神，日本人と自分以外のムスリム，親といった多方面に気を配り，見られ方を意識していることがうかがえ，在日ムスリムの置かれる文脈の複雑さがみてとれる。飯山（2019）は，ムスリマのヒジャーブ着用には，選択の自由がある場合と，強制である場合があり，教義解釈だけではなく，国の政策や社会のあり方とも関係していることを指摘している。

本研究のムスリマの経験では，自立して自由に楽しむ日本人女性の姿は彼女たちに刺激を与えるものとなり，ムスリムに関するネガティブなメディア報道は，「ムスリムとして良い行いをしなければならない」という使命感を抱かせていた。在日ムスリムが自らの行動を持ってイスラームへの正しい理解を促そうとする姿勢は，中川（2018）においても確認される。中川（2018）では，1 名のムスリマ留学生が，日本人が持つイスラームへの負の

イメージと，日本語能力の限界から，イスラームについて質問されることに不安を感じていること，宗教について説明する際に十分に気を遣っていることが報告されている。多方面に気を配る彼女たちの行動選択や振る舞いは，場面や状況によって異なる可能性も示唆される。行為や振る舞いを多面的に捉えることは，戒律の内容を基に想像されがちなムスリム像を多様化する一助になるだろう。

3. 本研究における限界

本研究における調査協力者の出身国はみな異なっており，多様な径路について考察できたものの，出身国の文化的特性や社会状況による差が個人の価値・行動に与える影響の大きさについては，はかり知ることができなかった。また，今回は地方在住のムスリマを対象としたが，都市部の方が多様な生き方や振る舞いに寛容かもしれず，異なった径路や価値を生む可能性があることにも留意したい。

引用文献

赤堀雅幸（2003）禁じられた食べ物．後藤晃・山内昌之（編），イスラームとは何か（pp. 198–199）．新書館．

廣瀬眞理子（2012）ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまで．安田裕子・サトウタツヤ（編），TEM でわかる人生径路——質的研究の新展開（pp. 71–87）．誠信書房．

イスラーム文化センター（2005）相互理解を目指して——イスラーム世界宗教の教えとその文明．イスラーム文化センター．

飯山陽（2019）中東情勢分析“イスラム的価値”再考——世界の事象から読み解く．中東協力センターニュース，19–25．

片倉もとこ（1990）異文化環境のアラブムスリム——ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの事例研究．国立民族学博物館研究報告書，*14*（4），821–884．

川喜田二郎（1967）発想法——創造性開発のために．中央公論社（中公新書）．

森山拓也（2015）ヒジャーブ・ファッションが顕すもの——装いから見るムスリム社会の変化，同志社グローバル・スタディーズ，*5*，3–24．

中川康弘（2018）「ムスリマであること」を保とうとする留学生の日常的実践——ライフストーリー法による新たな言説の構築と教育への示唆に向けて．教育科学研究，*32*，1–10．

Nakano, S., Okunishi, Y., & Tanaka., T. (2015) Interpersonal behavioral difficulties of Muslim students in Japan during intercultural contact situations. in P. Rogelia (Ed.), *Proceeding of the 10th Asian Association of Social Psychology Biennial Conference ‘Enhancing Quality of Life through Community Integrity and Cultural Diversity: Promoting Indigenous, Social and Cultural Psychology’* (pp. 154–170). Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.

Nakano, S., & Tanaka, T. (2017) Food acculturation among Mongolian students in Japan. *The 12th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology.*

中野祥子・田中共子（2019）日本人学生むけムスリム文化アシミレーターの改訂版を用いた異文化間教育の試み．文化共生学研究，*18*，53–66．

中野祥子・田中共子・奥西有理（2017）在日ムスリム留学生の異文化滞在に伴う困難の変容——国立大学理工系学生の 5 名の 2 年間を振り返る事例分析．異文化間教育，*46*，140–151．

Nakano, S., Tanaka, T., & Simic-Yamashita, M. (2017) Difficulties and coping strategy of Muslims in Japan during intercultural contact situations: Analysis of difficulties related to demographic, coping strategies. In M. C. Gastardo-Conaco, M. E. J. Macapagal, & Y. Muramoto (Eds.), *Asian psychology and Asian societies in the midst of change: Progress in Asian social psychology series*, Volueme 11 (pp. 29–58).

Pew Research Center (2020) Muslim population by community. `http://www.globalreligiousfutures.org/religions/muslims`（情報取得 2022/09/01）

桜井啓子（2003）身だしなみ．後藤晃・山内昌之（編），イスラームとは何か（pp. 200–201）．新書館．

サトウタツヤ（2022）TLMG（発生の三層モデル）——価値と行為を媒介する記号の働きに注目する．安田裕子・サトウタツヤ（編），TEA による対人援助プロセスと分岐の記述——保育，看護，臨床・障害分野の実践的研究（第 4 章，pp. 28–42）．誠信書房．

サトウタツヤ（2023）記号の取り違えとそのやっかい

さ――文化のズレを包摂するための記号の価値–行為媒介説：記号と文化心理学 その 3．木戸彩恵・サトウタツヤ（編），文化心理学〔改訂版〕（第 5 章，pp. 53–62）．ちとせプレス．

安田裕子・サトウタツヤ（2012）T M でわかる人生の径路――質的研究の新展開．誠信書房．

安田裕子・サトウタツヤ（2022）TEA による対人援助プロセスと分岐の記述――保育，看護，臨床・障害分野の実践的研究．誠信書房．

吉田京子（2003）天国と地獄．後藤晃・山内昌之（編），イスラームとは何か（pp. 18–19）．新書館．

◆謝 辞

本研究は科研費 18K12428 の助成を受けました。ご支援に感謝いたします。

発行：TEA と質的探究学会

Japanese Association of TEA for Qualitative Inquiry

https://jatq.jp/index.html

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

https://ratik.org